





(千 葉 県 水 一 ム ペ ー ジ
 {<http://map.yahoo.co.jp/prefmap/imap/admi/admi12.map>})

人口 13.103 人 (2000 年 11 月)

面積 27.46 平方キロメートル

はじめに

現在の国内観光は、国民の旅行ニーズの多様化と高度化の中で、厳しい状況にある。例えば、温泉の町として有名な大分県別府市や静岡県熱海市、そして修学旅行の定番である栃木県日光市などは、時代の変化・国民のニーズに対応することに苦しみ、現在、非常に厳しい状態である。また、今までと同様に、1泊から2泊といった短い日数の旅行への需要が多い。このことにより、長期滞在型旅行は伸び悩んでいる⁽¹⁾。ツアー価格の低下傾向や航空運賃の割引効果を背景にし、「個人型」「短期間型」の観光需要が伸びてきているのである。こうした中、このような「新しい型の観光」とは異なった動きをとる千葉県長生郡白子町に私達は注目した。それは、豊富な観光資源を要しながらも、以前の主流である「団体型」「長期間型」から離脱することなく、現在厳しい状況に置かれている老舗リゾート地であるが、資源を生産的に利用することにより、これからの国民ニーズに対して、幅広く対応ができる観光地としてのポテンシャルを秘めた町であると推測したからである。

尚、本稿は主要参考文献とともに、千葉県長生郡白子町商工会議所の応接間での白子町商工会事務局長・森田貞夫氏に独自にインタビュー（2002年8月1日午後1時から午後2時40分）させていただいたものと、インタビューさせていただいた際に宿泊した民宿「鵬洋荘」の鵜澤源子氏のお話、千葉県長生郡白子町商工会議所への電子メールなどに主に依拠しつつ、白子町への考察と提言を進めていくものである。

第1章 観光産業の現状

第1節 観光の意義

21世紀という新しい時代を迎えた今日、産業構造の変化等から従来の地域構

造が機能しなくなり、国内各地域における「まち」の停滞が指摘されている。こうした中、地域固有の自然・文化や伝統の保持・発展を図り、魅力ある地域を実現していく「観光の振興」がますますその重要性を増している⁽²⁾。また、グローバル化が進展する中、外国人との直接的な交流の場を提供する国際観光の振興は、国際相互理解の増進、国際親善・国際平和にも貢献するというおおきな意義を持っている。我が国が現在おかれている状況と観光の持つ役割や意義を考え合わせると、「観光振興」を21世紀の国づくりの柱とし、また、リーディング産業として、国・地方公共団体・経済界等が連携し、観光の振興を図っていく時代がきたと言える⁽³⁾。こうした中、具体的に国民は観光をどのように位置付けし、何を求めているのか述べたい。

第2節 観光の現状

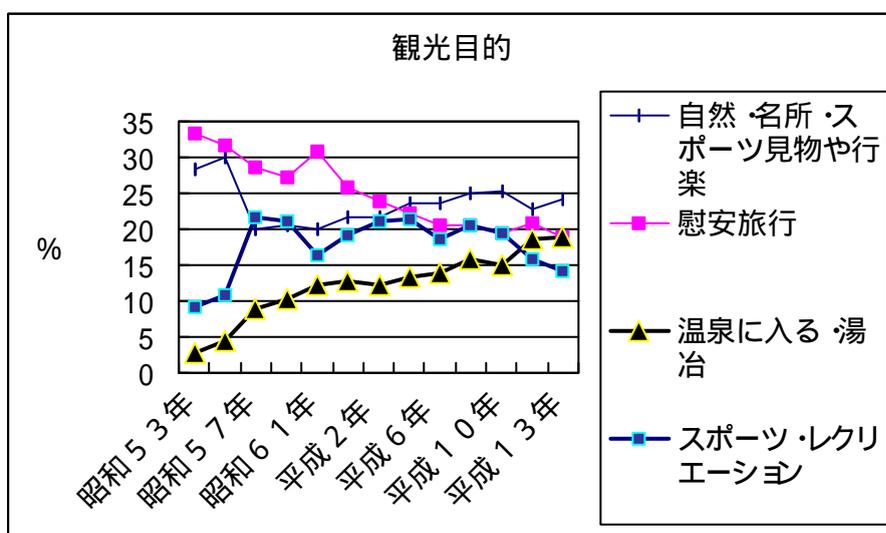


図 (社団法人・日本観光協会編『観光の実態と志向 第20回 平成13年度版』日本印刷株式会社、2002年、P4参照)

国民の意識として、今後生活で特に重点を置きたい分野として「レジャー・余暇生活」を挙げる国民が最も多く、また、余暇時間の活用と旅行に関する世論

調査では、3 日以上の連続休暇が増加した場合、宿泊旅行への志向が最も高くなっている⁽⁴⁾。そこで図にもあるように、宿泊観光旅行を行った主な目的を検証したところ、第1位が「自然・名所・スポーツなどの見物や行楽」となり、第2位が、1950年代後半から多くの日本人に支持され、1泊2日、温泉地へ団体会大宴会場を持つ大型旅館に組み入り、みな揃いの浴衣姿になりカラオケをし、バーをはしごするといった高度経済成長型の旅行である「慰安旅行」で、第3位が、個人・家族が主力のターゲットとなっている「温泉に入る・湯治」で、第4位が、サークルなどの学校単位での参加形態である「スポーツ・レクリエーション」となっている。1978年から見ると「慰安旅行」が減少しているのに対して、「温泉に入る・湯治」が大幅に増加している。また、「スポーツ・レクリエーション」が最近10年間では減少傾向にある⁽⁵⁾。しかし、「都市の散策」・「伝統文化とのふれあい」・「買い物・飲食」・「テーマパーク、遊園地」・「海洋性レクリエーション」などの体験型レクリエーションは高い支持を得ている⁽⁶⁾。宿泊観光旅行に際して、旅行会社などの募集団体に参加しなかった人の割合は72.1%、参加した人の割合は16%で、この傾向は1986年からほとんど変わっていない。しかし、募集団体へ参加しなかった人の中で、自分一人・家族・友人・知人などと旅行した「個人旅行」の割合は62.5%で、1986年度調査の52.9%から増加している。したがって、現在の宿泊観光旅行の傾向は、「個人型」が強くなっている⁽⁷⁾。

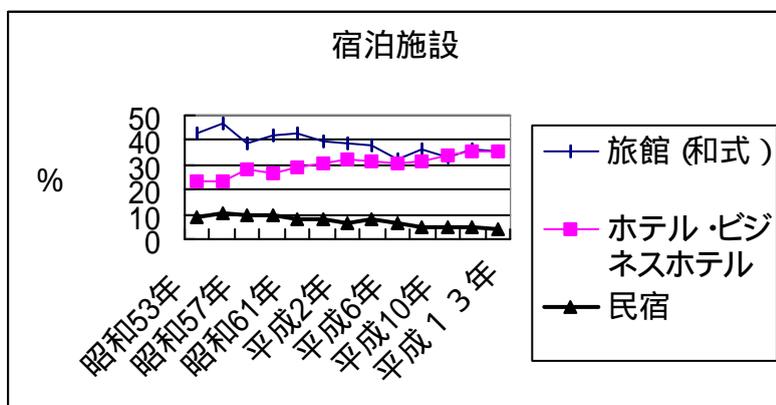


図 (社団法人・日本観光協会編『観光の実態と志向 第 20 回 平成 13 年度版』日本印刷株式会社、2002 年、P7 参照)

また図 にもあるように、宿泊施設は「旅館（和式）」が最も多く 35.7%、「ホテル・ビジネスホテル」35.6%と、この 2 つの合計で約 7 割を占め、つづいて、「国民宿舎等の公共宿泊施設」6.1%、ついで「知人・親戚宅」5.6%、そして「車・船中泊」4.3%の順となっている。1978 年からみると、「旅館（和式）」は、約 7 ポイントの減少となっており、「ホテル・ビジネスホテル」が 12 ポイント以上増加している⁽⁸⁾。

第 3 節 個の時代

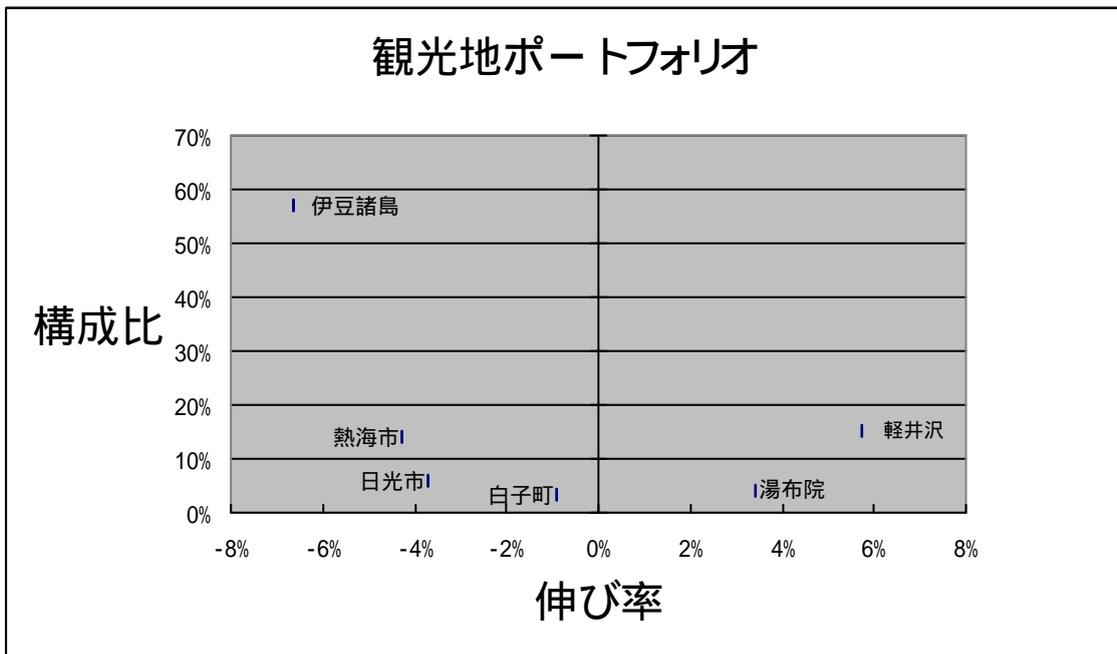


図 (大分県統計調査課編集・発行『大分県統計年鑑 平成 11 年・12 年・13 年度版』2000 年・2001 年・2002 年、千葉県企画部統計課編『千葉県統計年鑑 平成 11 年・12 年・13 年度版』千葉県統計協会、2000 年・2001 年・2002 年、静岡県企画部高度情報総室・統計利用室編『静岡県統計年鑑 平成 11 年・12 年・13 年度 11 年・版』静岡県統計協会、

2000年・2001年・2002年、長野県商工部観光課編『観光地利用者統計調査結果 平成11年・12年・13年』2000年・2001年・2002年⁽⁹⁾、日光ホームページ{<http://www.city.nikko.tochigi.jp>}のすべてを参照し、PPM分析したもの。)

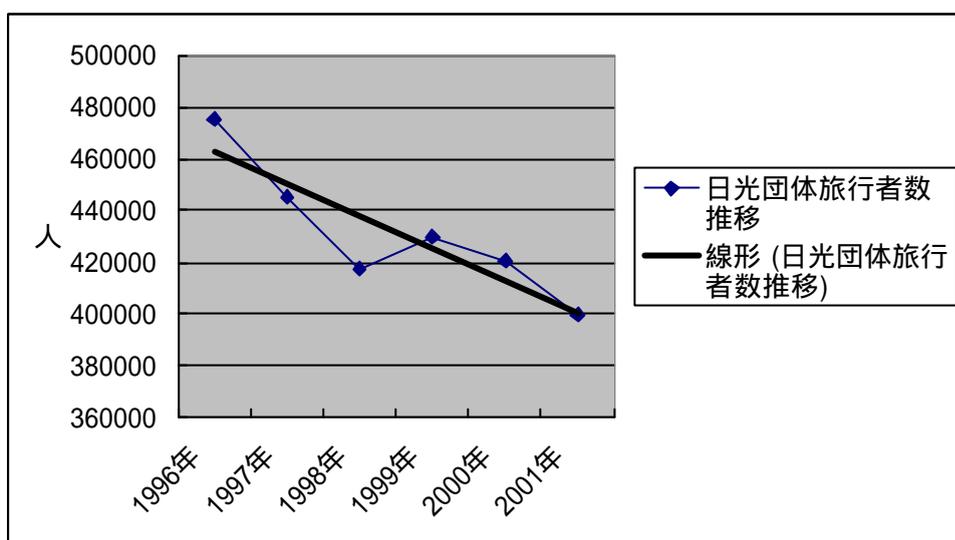


図 (日光ホームページ{<http://www.city.nikko.tochigi.jp>}を参照し、excelによる線形回帰分析)

このように、観光は厳しい状況にありながらも、宿泊旅行への関心が高まっているのも事実である。そんな中、観光産業にも「個」が求められている。例えば、「行ってみたい温泉地」「女性が行きたい温泉地」のナンバーワンとして魅力を保ち続けている湯布院⁽¹⁰⁾はその代表的な地である。この20年で急成長を遂げたと考えられがちであるが、それは間違いである。30年・40年という時間をかけて湯布院の「個」をつくりあげた。昭和30年代終わりから40年代にかけて、いち早くターゲットを女性に向けていた。また、長期滞在型を望む人が減り続けているなか、湯布院では連泊型のお客が増えている。1軒の宿に泊まるのではなく、6泊するとしたら2泊つつ3軒に泊まるパターンが増え続けている。さらに、「リピーター」の多さも湯布院の特徴である。さらに、若い人材も豊富に育ってきている。この湯布院の最大の功労者である中谷健太

郎氏⁽¹¹⁾は、「京都と湯布院が同じ舞台に立つところに観光のおもしろさがある。でも、京都に湯布院が勝てるわけがない。京都にない部分で勝負する。そのことが分かるまで京都に通い続ける。」と述べている⁽¹²⁾。すでに大成功を遂げたと言っても過言ではない湯布院でも、成長するため、そして湯布院の「個」をさらに磨くために努力を惜しまない。

これに対し、図 を見ても明らかなように、「負け組」に位置する熱海市・別府市は、ホテルの大型化⁽¹³⁾を図り、また日光市は、図 を見れば明らかなように、団体旅行者数が減り続けているのにもかかわらず、慰安旅行や修学旅行などに依存していたため、現在、非常に苦しい状況にある。熱海市・別府市・日光市のような旧型観光地は、価格が原価近くまで下がり、現在俗に言う「格安パック」の個人参加型団体旅行を受け入れて急場をしのいでいる。しかし、このような旧型観光地は、熱海市・別府市であれば「温泉」、日光市であれば「文化的建築物」をうまく活用できず、新たな「個」をつくりあげられてはいない。このような中、図にも見られるように白子町は、なぜ「負け組」に位置してしまったのか。

第 2 章 歴史から振り返る白子町の問題点

第 1 節 白子町・観光業の歴史

1955年に千葉県長生郡の3町（白湯町、関村、南白亀村）が合併して誕生した白子町のレジャー産業は、1965年の俗に言う「レジャー元年」⁽¹⁴⁾に国民宿舎「白子荘」⁽¹⁵⁾が完成したことで一気に熱を帯びる。その年の6月には、当時の町会議員であった篠崎政一氏⁽¹⁶⁾が4軒の民宿経営に乗り出し、海水浴シーズンには観光客で溢れ返るほどの賑わいを見せた。当時の「民宿ブーム」⁽¹⁷⁾の波に乗った格好である。

その2年後の1967年に民宿経営のプールが完成し、観光地として、名を上げ始めたが、観光客を夏場の海水浴シーズンしか集められないのが、地元の民宿経営者や観光事業者の共通の悩みであった。そこで前出の篠崎政一氏が、当時、軽井沢や山中湖でテニス場が人気を集めていたことに着目、通年型の観光都市を目指し、テニスコートの建設に乗り出す。そして1969年、400万円の投資で2面のテニスコートを完成させた。そこからは加速度的に白子町は「テニスの町」へと変貌を遂げていった。1971年にはその数を8倍の16面へと増やし、オイルショックによる国民のレジャー離れにも、都心から車で2時間という好立地を生かし、ほとんど悪影響を受けることなく、むしろ白子町のテニス産業は大きく躍進していった。

2面のクレイコートから始まったテニスコートの数は、現在約450面にまでその数を増やしている。世界ジュニアテニス選手権大会や関東大学ソフトテニス選手権大会、全日本ソフトテニス選手権大会等の大きな大会の開催地として広く利用され、その際、白子町を訪れる関係者の総数は3,000~4,000人にまで登り、旅館、民宿ともフル回転でその対応に追われている。

その一方で、近年、純粋な観光客の数は減少の一途を辿っている。通年型の観光都市を目指し、テニスコートの数を増やしたにも関わらず、旅行客が集中するのは、春、夏のテニスシーズンのみで特に秋、冬の利用客の減少は著しい。通年型の観光都市を実現するため、この問題をいかに解決するかが、白子町が取り組むべき重要課題となっている。

第2節 現在の白子町が抱える問題点

第1項 アウトオブデイトな宿泊施設

第1章でも述べたように、現在の日本の観光はかつてのような団体客を主としたものから個人客をターゲットとしたものに切り替わってきている。事実、

図にもあるように、宿泊観光旅行を行った主な目的で、「慰安旅行」は辛うじて第2位に留まってはいるが、昭和61年を境に急激な下降線を描いている。一方、個人客が主と思われる「温泉に入る・湯治」は順位こそ「慰安旅行」より下位の第3位にランクされるが、その線は緩やかながら上昇線を描き、パーセンテージは「慰安旅行」と変わらない位置にまで上ってきている⁽¹⁸⁾。つまり、今現在、日本の各観光地が主だったターゲットとしているのは、大学のサークルの合宿や企業の慰安旅行等の団体客ではなく、温泉等で癒しを求めることを目的とした家族旅行や友人同士の旅行等の個人客である。その場合、重要になってくるのがそこで提供される「サービス」である。1泊のコストが高めに設定されていたとしても、その金額に見合うだけのサービスが供給されるのであれば、客はそのサービスを目的に「リピーター」としてその観光地に幾度となく足を運ぶようになる。このような固定客をいかなるサービスをもって獲得し、増やしていくかが、現在の日本の各観光地の最重要課題となっているのである。その課題に早くから気づき、丁寧なサービスを心がけた旅館経営など、対策を練ってきた観光地、例えば先ほども述べた「勝ち組」と言われる軽井沢や湯布院等は観光客を減少させるどころか、むしろ大きな伸びを見せている。

一方、白子町は上記したような時代の流れから大きく逸れてしまっているのが現状である。町の旅館、民宿経営者や観光事業者がターゲットとして狙っているのは、湯布院や軽井沢の事業者とは正反対であるテニスコートの利用を目的とした大学のサークルの合宿である。しかし、それに関しても、今現在、非常に苦しい状態に陥ってきている。事実、テニスコートは町全体で約450面を保有しているが、その数はここ10年、完全な頭打ち状態である。その主な原因はメインターゲットとしていた「学生の合宿」が、学生数とテニスサークル数の減少によって、激減してしまったことにある。実際、最盛期には「テニスコート付き」を歌い文句にしたホテルや民宿が100軒ほど存在していたが、現在では、ホテル22軒、民宿23軒とその数を最盛期のおよそ半分にまで減らしてしまった。またここで言うところのホテルも湯布院のような、「リピーターの

獲得」を意識した充実したサービスを売りにしたものではなく、元々、民宿であったものが、テニスブーム⁽¹⁹⁾ 当時に増え続ける観光客に対応すべく建設されたものであり、また、より学生を集めるための施設であったため、民宿から規模を大きくしていったものに過ぎない。そういった事情のある宿泊施設であるため、湯布院の旅館等で受けられるような丁寧なサービスは期待できないのが現状である。つまり、白子町では未だに高度経済成長期に主流であった観光客を集めることだけを想定した、サービスの足りない接客業を中心としたホテル、民宿経営がその主流となっている。その高度経済成長期の緩慢な経営体制から抜けきれていないともいえる。例えば、前出した図にもあるようにかつて次から次へと集まった小学校高学年の団体修学旅行客に甘え、しっかりとした接客サービスを怠ったがために今や、観光地として立ち直れないほどのダメージを受けている栃木県日光市の二の轍を踏みかねない状況に白子町は陥っているのである。

個人客を想定した「リピーターの獲得」も大きくは望めず、また団体客を想定した慰安旅行やサークルの合宿も減少しているため、白子町はホテル、民宿経営の根本的な見直しに迫られている。

第2項 テニスブーム後の余波

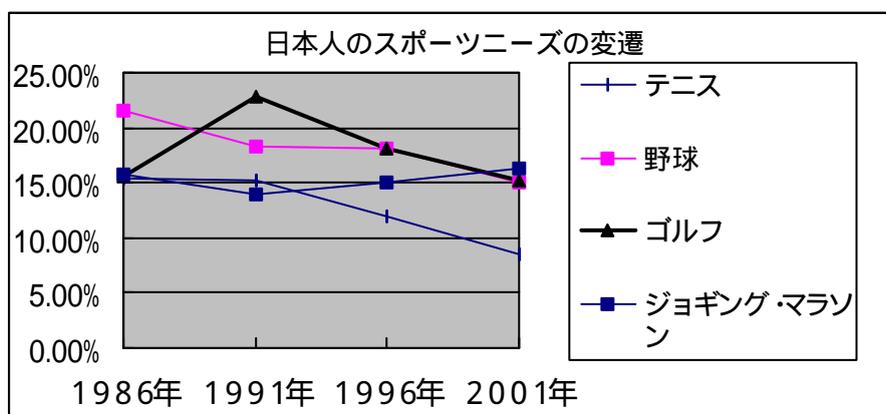


図 (総務庁統計局編集・発行『昭和61年 社会生活基本調査報告 全国生活行動編(そ

の1)』1988年 第9表、総務庁統計局編集・発行『平成3年 社会生活基本調査報告 第3巻 全国 - 生活行動編(その1、総括・スポーツ・学習・研究)』1993年 第8表、総務庁統計局編集・発行『平成8年 社会生活基本調査報告 第2巻 全国生活行動(余暇活動)編』1998年 第3-1表、総務庁統計局ホームページ { <http://www.stat.go.jp/data/shakai/yoyaku13k.html> } より「平成13年度 社会生活基本調査報告」、このすべてを参照⁽²⁰⁾し、excelでグラフ化したもの。

さらに、白子町が観光都市として確固たる地位を築けなかった理由としてテニスブーム後の対策を講じなかったことが挙げられる。ブームに便乗し続け、時代の流れを読めなかったことも大きな痛手の一つとなった。

90年代に入り、完全に下火となったテニスブームの影響でテニス人口は一気に減少していった。森田氏も「ブームの頃は企業からの要請もあったが今ではほとんどなくなってしまった。」とその実情を語っている。図にもあるように1986年にゴルフ、ジョギング・マラソンと共に日本人が日常的に行うスポーツランキングで野球に次ぐ人気を誇っていたが、1991年を境に急降下し、2001年の段階では他のスポーツに完全に水を空けられてしまった格好である。

事実、白子町では先程も述べたように1990年代に入ってからというものそれまで増え続けていたテニスコート数が完全に頭打ち状態となった。ここにもテニスブームが去り、競技者人口が減少していったこととの因果関係が見て取れる。ブーム時には週末やシーズン等にテニス愛好者で賑わったものの、今では図が示すように観光客数の伸び率がマイナスとなり閑古鳥が鳴いている状態である。

しかし、テニス人口が減少したことだけが、白子町の観光産業が衰退していった要因とは言い切れない面もある。白子町と同様にテニスコートを観光資源としている長野県軽井沢市は白子町のおよそ3倍の約1300面にも登るテニスコートを所有している。単純にその総数だけを比較すれば、軽井沢は白子町よりはるかにテニス人口減少の余波を受けていると想定できるが実際はそうでは

ない。図 にもあるように構成比、伸び率の点から軽井沢は観光都市の中でも「勝ち組」に位置付けられ、またその「勝ち組」の中においてもトップの位置についている。その中でも特に着目したい点が白子町と軽井沢の伸び率の違いである。白子町がマイナス 1%を示しているのに対し、軽井沢は 6%近い伸び率を示している。テニスコートを主だった観光資源としている町で、ブームが去り競技人口が激減する中、これほどの伸び率をしめしていることは驚異的とさえ言える。

その差を生み出した要因の一つとして、第 2 節の第 1 項で前出した白子町の「リピーター獲得」が期待できないサービスの足りない旅館、民宿経営が挙げられるが、もう一つの要因としてスポーツニーズの多様化に対応できなかったことが挙げられる。軽井沢の場合、夏のシーズンにはテニスコートの利用を目的とする観光客を集め、冬のシーズンにはスキー場の利用を目的とした観光客を集めている。一方、白子町が際立って観光客を集められるのは夏のテニスシーズンのみであり、その客層に関しても今現在、減少しつつある大学のテニスサークル合宿と多様化するニーズに応えられないでいる。

図 7-10 で見て取れるようにテニス人気は下降線を辿っている現在、軽井沢のようなテニスシーズン以外にも観光客を集められ、多様化するスポーツニーズにきちんと対応できる新たなスポーツを開拓する必要性に迫られている。

第 3 章 国際交流拠点としての白子町へ

第 1 節 白子町がこれから果たすべき役割

今日の国内経済の不振は、国内の観光需要に大きな影響をあたえている。各自治体は観光振興を地域活性化の柱の一つとして取り組んでいるが、国内観光の不振を受け、近年、インバウンド振興により積極的に取り組む姿勢に変化し

ている⁽²¹⁾。21世紀において、観光が我が国の産業として極めて重要になるとの認識の高まりの中、国内の観光関係者を中心に、自治体と町の住民が共に行動をおこすことを目的とした組織が設立された。しかしながら、現在の白子町の取り組みはこのような政策を活かしきることなく進められている。これからの白子町の目指すべきものは、このような政策を活かし、また、白子町が誇れるべき資源を有効かつ、効果的に利用することにより、現在の厳しい状況を打破しなくてはならないだろう。そのためには、自治体と住民が共にインバウンド振興の必要性を認識し、その振興の発達に伴った人材の育成、開発ということも必要になってくるであろう。国際間の観光交流促進の必要性は、1967年、国際連合が、観光を通じての国際間の人的交流が、国際間の相互理解、経済、あるいは政治的な摩擦の回避に貢献するとの観光振興の意義を認識し、その必要性を世界に訴えかけている⁽²²⁾。また、多数のテニスコートにこだわることなく、広大なスポーツスペースが存在するのであるから、その資源を有効かつ柔軟に利用するといった考えも必要になってくるであろう。

第2節 白子町独自のインバウンド政策

白子町が目指すべき町づくりは、「国際交流拠点」としての町づくりではないだろうか。国際交流拠点は、外来客訪促進地域を訪れる外客に対し、該当地域の紹介及び、外客のニーズに応じた同地域の観光ルート等の情報提供、同地域のテーマを反映した文化、歴史、伝統芸能等を直接体験できる施設を整備するもので、外客が同地域を旅行しやすい環境づくりを行う拠点として機能するものである⁽²³⁾。現在の白子町は、「スポーツと観光の町」を主に押し出している。その中で、テニスコートだけではなく、多目的グラウンドも整備されているので、野球・サッカー・フットサル(ミニサッカー)・陸上競技・ゲートボール、と利用価値は多い。体育館施設を所持する宿も存在するので、室内競技スポーツの合宿にも広く利用されている⁽²⁴⁾。それに帯同する宿泊関連施設(観

光拠点としても日帰り入浴としても利用できる白子温泉リゾート)として、白子町天然温泉街(ヨウ素を含む強食塩泉)、町営アクア健康センター(人口砂風呂のあるクアハウス)、四季の湯白子町ホテル街等が挙げられる⁽²⁵⁾。そして、白子町では、全国大会レベルのテニス大会、それに伴う合宿活動が頻繁に行われている⁽²⁶⁾。アジア選手権国内予選といった大きな大会も白子町で開催されている。テニスだけではなく、サッカー・フットサルの大会も天然・人口芝のグラウンドを利用して行われてきている。また、過去に韓国の高校生バスケットチームが、白子町を訪れ、今年も合宿地として利用してきている⁽²⁷⁾。2002年が日中国交回復30周年であるとともに、ワールドカップサッカーが日韓共同開催され、「日韓国民交流年」であること、また、中韓国交樹立10周年であることから、2000年11月の日中韓首脳会合において、同年を「日中韓国民交流年」とすることが合意された。2001年11月の3首脳会合においても、成功に向けて3国が緊密な協力をしていくこと、特に文化、観光分野の交流促進について、意見の一致をみた⁽²⁸⁾。このような状況から、日本国内でも有数の屋外スポーツ施設を有する白子町は、日本国内にとどまらず、アジア、世界のスポーツニーズの多様化に対応することができる国際交流拠点になり得るポテンシャルを秘めていると言えるのである。

第3節 国際的スポーツ交流拠点としてのSHIRAKOへ

そのうえさらに、白子町はさまざまな施策が必要になってくる。例えば、第三セクターによる白子温泉共同浴場の整備等で、村民への福利厚生だけではなく、国際的にも温泉療法等の紹介を行う施設を整備し、そしてこの第三セクター施設にリンクージした諸施設・スポーツジム・雨天用コート施設・海岸線のサイクリング・ジョギングコース設備。さらに、宿泊施設の近代化、特に民宿組合主導で民宿施設の近代化を目指すこと(それが可能な体力を持つ民宿の選別と

それ以外の老朽施設の淘汰も含めて)。これにより、白子のインバウンドを「観光事業」という側面からだけでなく、はじめて「国際ボランティア事業」化の可能性が見出せるのではないだろうか。またここで重要な事は、それらの施設整備を経済的に「公共事業」の枠組みだけでなく、民間の活力とさらに地域住民の協力（ボランティア）を主軸として構築していくことである。例えば、私達が実際に白子町を訪れてみたところ、民宿で送迎バスを所有しているにも関わらず、それを有効に利用しているところはほとんどなかった。このような民宿・旅館の遊休設備を効果的にフル活用し、ボランティアで交通面等の不備を補う事はある程度可能なことである。そのことも自治体は進行させていない。また、国際的な大会が行われる際には、成田への無料送迎バスの運行など、ボランティアでこなすといった取り組みも重要な意味をもってくるのではないだろうか。このような、ボランティアによる遊休施設のフル活用が、遊休レジャー施設の稼動に結びつく。そもそも、広大なテニスコートを遊ばせていても生産的ではない。それならば、障害者のテニス大会を開催し、積極的に国内外を問わず、子供たちを無料で宿泊させテニス教室を開く。このような交流こそ、国際交流といった側面でリードするポテンシャルを持つ白子町が率先して行うべきことである。

終わりに

以上、3章を通して日本の観光の現状、白子町の問題点、そして白子町への提言を述べてきたのだが、ここでひとつ留意しなければならない点がある。特に第2章で述べたように白子町の観光産業は日本の観光スタンダードから大きく遅れをとってしまっているが、それは必ずしも負の側面しか持たないというわけではない。

私達研究班が8月上旬に白子町へと実地調査に赴いた際、夏のシーズンにも

関わらずテニスコートはほとんど使用されず、宿泊した民宿も我々以外、宿泊客は皆無だった。町が醸し出す雰囲気はさびれた観光都市そのものだった。しかし、そこで観光業に長年携わる人たちの人間的な「温かみ」に触れたのもまた事実である。私達のぶしつけな質問にも、快く応じて下さった白子町商工会議所事務局長を務められる森田貞夫氏、またアットホームなサービスを提供して下さいました民宿「鵬洋荘」の鵜澤源子氏には感謝の意を表したい。確かに白子町は観光都市として一筋縄ではいかない問題を数多く抱え込んではいるが、全てが失われているわけではない。時代のニーズに適応し、先見の明を持つ事は観光都市として成功するには必要な事柄であるが、この「人の温かみ」こそが白子町が観光都市として再び成功する上で、最も大切なものである。

最後に、本稿を作成するにあたり快くインタビューさせていただいた方々、並びに、協力して下さいました方々に深く感謝の意を示したい。

参考資料

[文献]

- ・ 国土交通省編『観光白書 平成 13 年度版』財務省印刷局、2001 年
- ・ 篠崎政一著『篠崎政一自叙伝 悔いのない人生の歩み』日本製版株式会社、1991 年。
- ・ 運輸省編『運輸白書 平成 12 年度版』大蔵省印刷局、2000 年
- ・ 社団法人・日本観光協会編『観光の実態と志向 第 20 回 平成 13 年度版』日本印刷株式会社、2002 年
- ・ 国土交通省編『観光白書 平成 14 年度版』財務省印刷局、2002 年
- ・ 進藤敦丸著『観光行政と政策』明現社、1999 年
- ・ 駄田井正編著『21 世紀の観光とアジア・九州』九州大学出版会、2001 年
- ・ 稲垣勉著『観光産業の知識』日本経済新聞社、1981 年
- ・ 長谷政弘編著『観光ビジネス論』同友館、1999 年
- ・ 大橋昭一・渡辺朗著『サービスと観光の経営学』同文館出版、2001 年

- ・ 石原照敏・吉兼秀夫・安福恵美子編著『新しい観光と地域社会』古今書院、2000年
- ・ 井上和衛・中村攻・宮崎猛・山崎光博著『地域経営型グリーン・ツーリズム』都市文化社、1999年
- ・ 井口貢編著『観光文化の振興と地域社会』ミネルヴァ書房、
- ・ 米浪信男著『観光と地域経済』ミネルヴァ書房、2000年
- ・ 松田忠徳編『温泉主義 NO3』くまざさ出版社、2002年
- ・ 小方昌勝著『国際観光とエコツーリズム』文理閣、2000年
- ・ 長野県商工部観光課編『観光地利用者統計調査結果 平成11年・12年・13年』長野県商工部観光課観光振興係、2000年・2001年・2002年
- ・ 前田勇編著『現代観光学キーワード事典』学文社、1998年
- ・ 山上徹・堀野正人編著『ホスピタリティ・観光事典』白桃書房、2001年
- ・ (特)国際観光振興会(JNTO)編著『JNTO 国際観光白書・世界と日本の国際観光交流の動向』(財)国際観光サービスセンター、2002年
- ・ 丸井博著『南関東における都市化の進展：工業・商業・観光の成立』大明堂、2001年
- ・ 社団法人日本観光協会編集発行『全国観光動向 平成12年度』2002年
- ・ 白子町史編纂委員会編『白子町史』白子町、1965年
- ・ 総務庁統計局編集・発行『昭和61年 社会生活基本調査報告 全国生活行動編(その1)』1988年
- ・ 総務庁統計局編集・発行『平成3年 社会生活基本調査報告 第3巻 全国生活行動編(その1、総括・スポーツ・学習・研究)』1993年
- ・ 総務庁統計局編集・発行『平成8年 社会生活基本調査報告 第2巻 全国生活行動(余暇活動)編』1998年
- ・ 大分県統計調査課編集・発行『大分県統計年鑑 平成11年・12年・13年度版』2000年・2001年・2002年
- ・ 千葉県企画部統計課編『千葉県統計年鑑 平成11年・12年・13年度版』千

- ・ 葉県統計協会、2000年・2001年・2002年
- ・ 静岡県企画部高度情報総室・統計利用室編『静岡県統計年鑑 平成11年・12年・13年度版』静岡県統計協会、2000年・2001年・2002年

《インターネット》

- ・ 千葉県白子町サッカートップページ、<http://www.serienet.com/conven/soccer.html>
- ・ 千葉県白子町・千葉の温泉、<http://dir.biglobe.ne.jp/dir/182188/182523/178023/178052/178057/177639/>
- ・ 千葉県白子町中体連関係大会結果、<http://homepage1.nifty.com/marhir/tennis/jh.htm>
- ・ 総務庁統計局、<http://www.stat.go.jp/data/shakai/yoyaku13k.html>
- ・ 日光ホームページ、<http://www.city.nikko.tochigi.jp>

[注]

- (1) 運輸省編『運輸白書 平成12年度版』大蔵省印刷局、2000年、372頁。
- (2) 国土交通省編『観光白書 平成13年度版』財務省印刷局、2001年、1頁。
- (3) 国土交通省編『観光白書 平成14年度版』財務省印刷局、2002年、13頁。
- (4) 運輸省編『運輸白書 平成12年度版』大蔵省印刷局、2000年、372頁。
- (5) 社団法人・日本観光協会編『観光の実態と志向 第20回 平成13年度版』日本印刷株式会社、2002年、4頁。
- (6) 国土交通省編『観光白書 平成13年度版』財務省印刷局、2001年、22頁。
- (7) 社団法人・日本観光協会編『観光の実態と志向 第20回 平成13年度版』日本印刷株式会社、2002年、7頁。
- (8) 同上、7頁。

- (9) (社)長野県観光協会観光振興課 吉見秀明氏に2002年8月25日に、自宅に送っていただいた物。
- (10) 1000m以上の山々囲まれた盆地にあり、人口1万2000人弱の小さな町である。全国3位という豊富な湯量を誇る温泉と100軒あまりの個性ある湯宿を持つ。ガイドブックには、『湯布院』であったり『由布院』と表記されたりしている。町名としての正式な表記は、『湯布院』と書く。これは昭和30年に“由布院町”と“湯平村”が町村合併する際、湯平の“湯”を採って、現在に至る。湯布院町には「由布院」「湯平」「塚原」の3つのおもな温泉地がある。これら3つを総称する時は、“湯布院温泉”と表記するが、「由布院」のみを単独で紹介する時は、“由布院温泉”となる。
- (11) 1934年、湯布院町生まれ。明治大学卒業後、東宝撮影所に入社し、助監督を務める。1962年、父の死により帰郷し、「旅館亀の井荘」を継ぐ。映画祭や音楽祭などの湯布院における数々のイベントを企画する。著書に『湯布院発、にっぽん村へ』(ふきのとう書房)、『湯布院幻燈譜』(海鳥社)、『たすきがけの湯布院』(アドバンス大分)がある。現在、「旅館亀の井荘」代表取締役。
- (12) 松田忠徳編『温泉主義 NO3』くまざさ出版社、2002年、36頁。
- (13) 熱海や別府をモデルに、高度経済成長期に日本中の温泉地が拡大路線を突き進んできた。巨大化したホテルが迷路のような館内にラーメン屋からスナックまで作り、温泉街もどきを演出していた。
- (14) モータリゼーションの進行や海外旅行の自由化もあって、レジャーに占める旅行のウエイトが高まった年。スポーツ施設や遊園地などが急増し、レジャーの大衆化・大型化が進んだ。
- (15) 厚生省が全国各地に国民の余暇のための施設作り、すなわち「国民宿舎建設事業」の一環として、1960年に白子町に作られた民宿。
- (16) 白子町にテニスを根付かせた人物。1991年に、自叙伝『篠崎正一自叙伝 悔いのない人生の歩み』(日本製版株式会社)を刊行している。この本は、

白子町商工会図書館に所蔵され、未刊行のため、私達が白子町商工会をFW
(フィールドワーク)させていただいた際に、同所事務局長・森田貞夫氏
のご好意により、1部をコピーさせていただいたもの。

- (17) 1960年代に入り「スキー民宿」、「海水浴民宿」の利用者が急増した現象。
民宿の収容力が1960年の10,500人から1964年には332,000人と実に
33倍に膨らんだ。
- (18) 社団法人・日本観光協会編『観光の実態と志向 第20回 平成13年度
版』日本印刷株式会社、2002年、4頁
- (19) 1959年の皇太子ご成婚により発生した戦後の第1次ブーム。
- (20) 各スポーツ別の行動者数を全スポーツ行動者の総数で割り、パーセンテ
ージに直した。
- (21) 国際観光振興会編『JNTO 国際観光白書 世界と日本の国際観光交流の動
向』国際観光サービスセンター、2002年、8頁。
- (22) 同上、6頁。
- (23) 運輸省編『運輸白書 平成12年度版』大蔵省印刷局、2000年、355頁。
- (24) 千葉県白子町サッカートップページ
「<http://www.serie-net.com/conven/soccer.html>」
- (25) 千葉県白子町 千葉の温泉
「<http://dir.biglobe.ne.jp/dir/182188/182523/178023/178052/178057/1776391/?AR>」
- (26) 千葉県白子町中体連関係大会結果
「<http://homepage1.nifty.com/marhir/tennis/jh.htm>」
- (27) 『鵬洋荘』女将・鶴澤源子氏インタビューによる。
- (28) 国土交通省編『観光白書 平成14年度版』財務省印刷局、2002年、99
頁